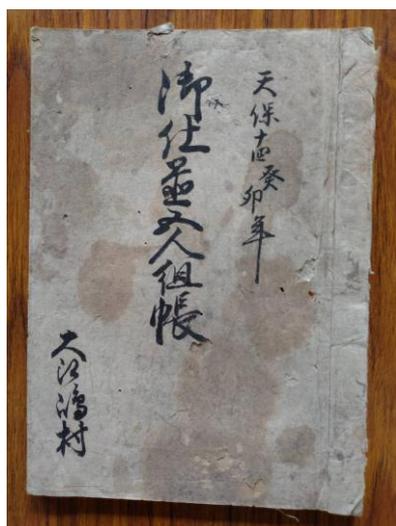


郷蔵は石碑にあるように、江戸時代、郷・村に設置された共同の倉庫で、年貢米の一時的な保管倉庫であった。平成10年発行「古きロマンを訪ねて」（網干古文書学習会）によると、天保十四年の古文書『御仕置五人組帳』には、「御年貢米は上等米をていねいに俵詰する事。又郷蔵へ入れる時は、庄屋・年寄が立会い、米の数を各人別に書いて、庄屋より受取書渡し、その後は出入りさせない事」とあり、年貢米を納める時の緊張感が伝わる。また同書別条に、「郷蔵や番屋に番人以外の不審な者見たら、大声で知らせる事。泥棒などが居たら、番人や近所の者達で捕え無理に殺さない事。」とあり、常日頃番人が居り、厳重に警備されていたことが窺える。郷蔵のもう一つの用途は、凶作時の備蓄用倉庫である。姫路藩内に残る固寧倉に共通する点である。納税・治安を連帯責任とした五人組は、260年続いた幕府を支えた最末端組織である。今日残された郷蔵は、村、藩、ひいては日本全体を支配した幕藩体制の巧妙で緻密な統治を今に伝えている。

明治を迎え、府県制の施行と共に、地方行政は庄屋に代わって戸長が行うこととなり（『大江嶋物語』より引用）、郷蔵も戸長役場に名を変えた。その後戸長役場は、明治十六年に他村と連合、明治十九年には大江島協議所となり、昭和三十四年まで記録に残っている。引き続き屋台蔵としての役目を果たし、大江島中央公園に新屋台蔵建設後は旧屋台蔵と呼ばれ、祭り関係の倉庫として現役である。

激変する時代の中で、その時々々の社会の要請に応えてきた歴史的価値の高い建築である郷蔵が、現代に残されたのは稀有な事であり、大江島の古文書を多数後世に伝える役割を果たしたのは大変意義深いことである。

網干歴史講座会員 和木節子



[御仕置五人組帳の表紙]



[揖東郡大江嶋村戸長役場の箱]



[戸長役場の印鑑箱]